

## 君の名は・・・

昨年3月、道南地方のとある藪の中を散策していたところ、動物の頭骨(頭の骨)を見つけました。藪や川沿いなどの「けもの道」では、野生動物の亡きがらに出くわすことが少なくありません。特に多いのはエゾシカの骨ですが、エゾシカの頭骨は上から見るとおでこから鼻筋にかけて細くなっていきスマートな形をしているのに対し、こちらは横幅が広くがっしりした印象です。形はどちらかというキツネやタヌキに似ていますが、それにしてはだいぶ大きい気がしました。

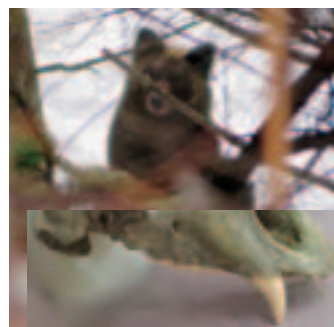
これはもしや・・・?と思い、その頭骨を道東のとある博物館で見させていただいたところ・・・そのもしや、でした。

キツネやタヌキは哺乳類の中でも「食肉目」というグループに分類され、肉を引き裂き食べるのに適した鋭い歯を持ち、犬歯(牙)が大きく発達しています。イヌやネコも同じ食肉目の仲間なので皆さんの家にもいたら観察してみたいのですが、食肉目の多くは奥歯まで鋭い形をしています。それに対し、この頭骨は前歯の形は食肉目のそれでしたが、奥歯は人間と同じ平たい形をしていました。前歯は肉を切り裂けるように、奥歯は木の実や草などをすり潰して食べやすい形に発達していることから、この



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。

頭骨の持ち主はお肉から植物性のもまで食べる雑食性だということがわかります。また、強い顎の筋肉を支えるために頬の周りの骨が大きく膨らんでいるのもこの動物の特徴なのだそうです。(私が持ったものは一部欠けてしまいましたが…)



この頭骨、何の動物かもうおわかりいただけましたでしょうか。答えは、写真の動物です。ところで、一部では「人を食べる」イメージを持たれがちなヒグマですが、東川の町中から旭岳温泉街までの道路沿いによく落ちている彼らのフンを目視した限りだと、内容は葉っぱの繊維や種子などがほとんどで、植物中心の食生活をしているように見受けられます。

皆さんも、彼らのフンを目にする機会があったら、何を食べているのか観察してみるのも面白いかもしれません。ただし、お互いの安全のためにも「持ち主」とは鉢合わせしないよう気を付けて…。

旭岳ビジターセンター 高橋 可翔



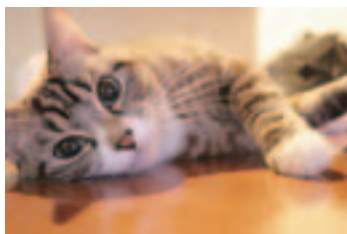
## 中国のペット事情(その2)

東川町国際交流員(CIR)

隋 娟

近年の中国では、猫ブームの拡大に伴い、「吸猫」「猫奴」など、ネット上で猫に関する造語が次から次へと誕生し、流行するようになり、人々の猫に対する熱愛ぶりを物語っています。

「吸猫」というのは、空気を吸うように「猫」を吸うわけではなく(恐ろしい光景になります)、猫に触れたり抱きしめたり、ついには猫のモフモフに顔を埋めてその匂いを嗅いだりといった行動の比喩です。「吸う」という動作の対象としてよく挙げられるのはタバコなどの依存性の強いものですが、「猫を吸う」と言うのは、「猫の愛好家が中毒者のように狂ったような愛し方をすること」と理解して良いでしょう。



どうもその過度の愛し方は国境に関係なく、世界中の猫好きさんに共通しているようです。日本にも「猫吸い」という言葉がすでにあるようで、『ネコの吸い方』(坂本美雨著、幻冬舎、2014)という本まで出版され、猫の吸い方マニュアルが書かれているそうです。次は「猫奴」です。文字通り、自分が

「猫様」の「奴隷」であると、猫好きさんが自分たちのことを自嘲的という時に使う言葉です。猫様のこととなればとんとんで尽くし、猫への熱狂ぶりを誇らしげにアピールしている人もインターネット上でよく見かけます。

そもそも中国の「猫崇拜文化」は最近始まったわけではなく、中国の長い歴史の中に有名な「猫奴」は数えられないほどいます。中でも、最も中毒度・溺愛度が高いと評判なのが明時代の嘉靖(かせい)皇帝です。嘉靖帝は霜眉(そうび)という名の猫を溺愛したあまり「龍(神聖なもの)」と封じ(ほうずる)爵位を与え、その遊びの相手になるため20年間も大臣との早朝会議に参加しなかつたと言われています。霜眉が死んだ時には悲嘆にくれ、金の棺桶で葬つただけでなく、全国の文化人に追悼の文章を書かせました。その中に霜眉の死を『化獅為龍』(猫は死んだのではなく龍に化けた)と描写して嘉靖帝にたいそう気に入られ、一等官僚に昇格した人もいたそうです。

昨今の外出自粛により自宅を過ごす時間が増える中、猫ニーズも急増しています。実際に飼う条件が整っていないくても、ネット上で猫のかわいい動画などを見てイライラや不安を癒してもらっている人も多かつたようで、どうもコロナ禍が猫ブームに一層拍車をかけたようです。やはり、猫がもたらす癒しは古今東西変わりありませんね。